

本当の聖牛の巻 (2010年7月)

インド人、いやヒンドゥー教の人は牛を崇拝しています。しかし、それはどんな牛でも崇拝すると言うわけではありません。普段、街で見かける水牛や乳牛ではありません。崇拝する聖牛は背中にコブがあり色の白い牛なのです。そのコブ牛が街で車を引いているのをよく見かけます。でも崇拝するのはこのコブ牛の中でもメス牛であるというのです。乳やチーズを生産するからです。しかしシヴァ神の乗り物のナンディンはオス牛ですよね。



これーコブのオスです      正面からみると変な顔です      これ普通の野良の乳牛です

通勤中に草の生えた広場に白い牛がじっと立っているのが毎日車の中から見えました。

毎朝毎夕同じ場所に同じ格好をしているのです。コブ牛です。メス牛です。さすが聖牛です。毎日同じ姿勢で立っているのです。だから人々が牛を崇拝するのだと感心して毎回近くを通るときにそのコブ牛を眺めていました。私の運転手が長い結婚休暇から



帰って来た翌日にあそこに立っている牛の写真が撮

りたいので道から      いつもじっとしてしていました。



近づくと張りぼてでした。

外れて広場に入ってくれと頼みました。そして牛に近づいて行きました。ちっとも動きません。それもそのはずです。本物ではありませんでした。足元をみるとソリのようなもので固定されています。きっとお祭り用の造りものだったのでしょうね。運転手は車の中

から私とその張りぼてを見て笑っていました。でも、彼も最初は本物だと思っていたそうです。その張りぼて牛のそばにはガネーシャの祠がありました。きっとガネーシャ祭りの行列にその牛も加わったのでしょうか。ガネーシャはシヴァ神の長男で、牛のナンディンはシヴァ神の乗り物です。またナンディンは四足動物の守護神とも言われます。踊り上手なシヴァ神の音楽を奏でる役を担うとも言われます。



シヴァ・ファミリー

シヴァ・ファミリーです。ガネーシャ、シヴァ、パールヴァティ（妻）、スカンダ（次男）その足元にはナンディンと孔雀がいます。シヴァ神は頭からガンジス川の水が噴きだしていますよね。ようーく見るとナンディン（牛）の上にネズミが乗っています。ネズミはガネーシャ乗りもの（ヴァーハナ）です。そして孔雀はスカンダの乗り物です。ネズミとウシは日本の十二支の『子丑寅卯辰巳午未申酉戌

亥』最初の2匹ですよね。その十二支は中国から来ました。お釈迦様が召集して集まった来た順番と違います。インドでは十二支の酉は鳥で『ガルダ』になっているとか。それでは寅は『ベンガル虎』で、申は

『ハヌマーン』となり、亥は街で見かける『野良豚』なのでしょうか？

シヴァ神とライバルのヴィシュヌ神にも牛が関係してきます。それはヴィシュヌ神が変身するクリシュナのお話にも牛がでてくるのです。クリシュナはインド人が大好きな神様です。一番人気です。でもクリシュナは王子として生まれながらも牛飼いの家にかくまわれて育ちました。それでクリシュナには牛と一緒に描かれた絵が多いのです。また数多くあるクリシュナの別銘のなかでもゴバル・クリシュナというのは牛飼いの子クリシュナという意味です。



クリシュナは笛の名手でもあります。